

## 論 説

## 社会的分業と工場内分業 — アダム・スミスによる二つの私有の混同 —

頭 川 博

### は し が き — 問題の所在

前稿「資本主義的生産関係と生産力」(『一橋論叢』第117巻第6号, 1997年)で、『資本論』第I巻第4篇におけるマルクスの独創性はどこにあるのかという基本問題を提起した。その結論は、ごく簡単に要約すれば、つぎのとおりである。すなわち、古典派は、相対的剰余価値生産が生産力発展に依存する因果関係を説明した半面で、その生産力増進の社会的基礎には資本家による生産条件の排他的な所有という歴史的な契機がひそむ事実を看過した。資本主義的生産では、社会的な生産条件の資本家による排他的所有という敵対的な生産関係に規定されて、労働過程が多数労働者による共同労働という労働の独特な社会的形態を新しく獲得することによって、生産力が大規模に拡大するのである。そもそも生産活動が工場という特有な空間で本格的に実現されるのは、歴史上資本主義になって初めての事実にすぎない。だから、古典派をこえるマルクスの独創性は、生産力発展の社会的基礎を特殊歴史的な生産関係にもとめたところにある、と。

ところが、第4篇をめぐるマルクスの独創性が敵対的な生産関係という生産力発展の社会的基礎の発見にあるとすれば、そこから必然的に第4篇第12章第4節でマルクスが論じた資本主義的生産のもとでの社会的分業と工場内分業との区別とはなにかという問題の解決が与えられることになる。つまり、第4篇をめぐるマルクスの独自性は、社会的分業と工場内分業のアダム・スミス(17

23—90)による概念的な混同とはなにかをとく鍵を内包している。なぜならば、部分労働の共同生産物が商品になる工場内分業こそは、少数の資本家による社会全体の生産条件の排他的所有に物質的な裏づけをもち資本主義的所有を表現しているのに反して、商品交換によって媒介される社会的分業のほうは、多数の商品生産者への生産条件（生産手段プラス生活手段）の分散を前提するから、生産者による生産条件の個人的所有によって原理的に成り立つにすぎないからである。つまり、資本主義的生産を前提すれば、社会的分業と工場内分業とは個人的所有と資本主義的所有という本質的に相異なる二つの私有の表現として区別されるという主張が、第4篇に埋めこまれたマルクスの独創性から自動的に生まれる。しかし、従来、工場内分業は、それが資本に特有な生産形態として存在するがゆえに、相対的剰余価値生産に結果する生産力増進の特殊歴史的な一方法として分析される所以が不明確な現状にある。その必然的な帰結として、社会的分業と工場内分業の区別とは、実は個人的所有と資本主義的所有という二つの私有の区別と等価だという事実が看破されていない。従ってまた、社会的分業と工場内分業とのスミスによる混同とは、個人的所有と資本主義的所有との混同に還元される。因みに、第7篇第25章「近代植民理論」の冒頭で、マルクスはずばりつぎのように確言する。「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している。」(*Kapital*, I, S.792, *Kapital*の訳文は、原則的に『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻—第25巻,大月書店によった)生産者の自己労働にもとづく個人的所有と他人の搾取にもとづく資本主義的所有という二つの相異なる私有の混同は、スミスによって代表される。けだし、マルクスはスミスにかんしてつぎのように指摘しているからである。「アダム・スミスは、商品生産一般を資本主義的生産と同一視している。」(*Kapital*, II, S.387)「スミスは資本主義的生産をやはりまだあちこちで直接的生産者のための生産と混同している。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫,岡崎次郎訳,488 [原] ページ)そこで、マルクスのいうスミスによる二つの私有の混同とは、まずもって、商品交換によって媒介される社会的分業と部分労働の共同生産物が商品になる工場内分業との無区別であると推論される。第12章第4節での二つの分業の混同批判がイコール二つの私有の混同批判であるがゆえに、マ

ルクスは、第25章でその理由説明なしに古典派による二つの私有の混同命題を提示しえたように思われる。

それゆえ、本稿の課題は、工場内分業が資本家による生産条件の排他的所有に立脚する因果の考察によって、スミスによる二つの分業の混同が二つの私有のそれに還元されることを解析する半面、なぜ二つの私有が概念上区別されないかその根因をときあかす。

## 1 二つの分業の相異なる社会的基礎

マルクスが第4篇で生産力増進方法の一つとして工場内分業を分析対象にすえたのは、それが相対的剰余価値生産に結実する生産力増大の特殊歴史的な方法だからである。相対的剰余価値生産という特殊歴史的な富の増大には、工場内分業を含む生産力増大の特殊歴史的な方法が対応する<sup>1)</sup>。そこで、本節では、工場内分業は、商品交換に媒介される社会的分業が単なる個人的所有に立脚するのは異なっており、資本家による生産条件の排他的所有という特有な社会的基礎のうえに成り立つ事実を主張する。

まず最初に、「職業の分離すなわち社会的分業」(*Mehrwert, MEGA, II / 3 · 4, S. 1402, MEGA*の訳文は原則的に『マルクス資本論草稿集』[1-9]大月書店によった)とか「社会的分業あるいは社会的労働の分割」(*MEGA, II 3 · 1, S. 241*)あるいは「分業すなわちある一つの機能の独立化」(*Kapital, II, S. 136*)という表現がしめすように、社会的分業は、別々の生産者によって独立的に支出される具体的有用労働の総体から成り立つ。土地の天然産物の多様性が「社会的分業の自然的基礎」(*Kapital, I, S. 536*)をなし、社会的分業そのものは生産形態のいかんを問わず超歴史的に存在する。商品交換とは、異種の具体的有用労働の結実した使用価値同士の持ち手の取り替えだから、社会的分業を基礎にして商品交換が成立する。「社会的分業は商品生産の存在条件である。」(*Ibid., S. 56*)商品交換に媒介される社会的分業は、生産条件の個人的所有によって規定される。労働者が各自生産条件をもち自己労働によって生産活動に従事する独立生産者の場合、相異なる種類の商品の交換によって生

産活動の前提に存在する生産条件が更新され独立生産者が再生産される。特定の具体的有用労働を支出する独立生産者の再生産とは、生産部面ごとに相異なる具体的有用労働の支出から構成される社会的分業の成立と同じである。つまり、個人的所有があれば、商品交換による社会的分業は原理的に成り立つのである。因みに、マルクスは、「社会の生産物が一般的に商品という形態をとっている社会では、…独立生産者 (selbständige Produzenten) の私事として営まれるいろいろな有用労働の…質的な相違が、…社会的分業 (eine gesellschaftliche Teilung der Arbeit) に、発展する」(*Kapital*, I, S. 57) と明言している。ここで「社会の生産物が一般的に商品という形態をとっている社会」とはまぎれもなく資本主義社会である<sup>2)</sup>が、その資本主義社会で社会的分業を構成する異種の具体的有用労働が「独立生産者」に発するという規定に細心の注意を要する。ここでの「独立生産者」とは具体的には資本家のことであるが、資本家同士は市場では単なる商品生産者として相対するにすぎないかぎりでは、具体的有用労働の総体を構成する資本家同士の関係は、資本家的な商品生産者の関係ではなく、社会的分業をになう独立生産者の関係と原理的に同一の単純な商品所有者の関係に還元帰着するからである<sup>3)</sup>。生産方法が大規模な協業であっても、生産された商品は資本家による個人的所有の対象であるから、市場において、資本家は、商品のバックにひそむ資本主義的な生産方法のいかんによらず、個人的所有の担い手として抽象化される。近代工場が生み出す商品は資本家の個人的所有に帰属するから、資本家同士の単なる商品所有者としての相対というマルクスの命題は、市場では資本家が個人的所有をあらわすという規定を含有しているのである。単純流通上で自己労働にもとづく個人的所有をあらわす「商品生産の所有法則」(*Ibid.*, S. 605) が成り立つという命題は、直接的には単純流通の担い手が資本家である場合の規定である。「自分の労働にもとづく個人的な私有」(*Ibid.*, S. 791) をあらわす「商品生産の所有法則」は単純流通の担い手が独立生産者の場合だけの命題だとすれば、資本主義の基礎上でその妥当性は否定され、所有法則の論理的な転回は成立しないことになる。個人的所有のもとでの生産活動は、歴史上「独立手工業」(*Ibid.*, S. 359) ・「個々別々な独立な生産」(『直接的生産過程の諸結果』, 442

[原] ページ) として営まれる。従って、「独立手工業」とマニュファクチュアとは対立概念である。

他方、一つの社会を構成する独立生産者によって所有された生産条件は、それがその独立生産者から収奪されれば、少数の人々のもとへ集積して資本の素材的実体を形成する。その生産者と生産条件との歴史的な分離過程である本源的蓄積によって、個人的所有は、社会的な生産条件の排他的所有からなる資本主義的所有へと転化する。資本主義的所有では、少数の資本家によって社会全体の生産条件の排他的所有が成り立つがゆえに、個人的所有の場合に比して大規模生産が必然的に成り立つ。多数の独立生産者に帰属した生産条件の少数資本家のもとへの集積は、一つの作業場での労働者の協業の物質的基礎である。「協業は、資本家の手中への労働手段の集積ならびに生活手段の集積を必要とする。<sup>4)</sup>」(MEGA, II / 3・1, S. 234, 圈点—マルクス) 資本家に集積した生産条件のうち、一方の生産手段は協業が成り立つ作業場を形成し、他方の生活手段はそこで働く多数労働者の労働力の再生産に入りこむ。従って、資本家による生産条件の排他的所有は、即自的に独立生産者の場合に比して生産活動の大規模化を内蔵しているのである。「資本主義的生産様式は生産の大規模を前提する。」(Kapital, II, S. 114) 「大規模生産 (die Produktion im großen) は資本主義的形態ではじめて発展する。」(Ibid., III, S. 96) 「資本主義的生産ははじめから大量生産 (Massenproduktion) である。<sup>5)</sup>」(Ibid., III, S. 191) 資本家による生産条件の排他的所有が協業の成り立つ大規模生産を規定するとすれば、「孤立的な労働」(『直接的生産過程の諸結果』, 472 [原] ページ) は、「大規模な労働」(同ページ, 圈点—マルクス) に転化する。多数労働者の共同労働はいくつかの種類の部分労働に分割され、全体の最終結果として初めて完成生産物のできる分業が同時に形成される。分業は一つの空間での多数労働者の共同労働=協業をその物質的前提とする一方、16世紀なかばに発生した資本主義は、分業にもとづく協業つまりマニュファクチュアという生産形態で出発した。まさに、「マニュファクチュアの第一の基礎」(Kapital, I, S. 380) は、「労働者にたいして生産手段<sup>6)</sup> が資本として独立化される」(Ibid.) ことにある。

だから、資本家による生産条件の排他的所有を物質的な裏づけとして初めて分業を伴う大規模生産が形成されるかぎりでは、工場内分業は、社会的分業と違って、資本主義的生産に特有な生産形態である。「マニユファクチュア的分業は、資本主義的生産様式のまったく独自の創造物 (eine ganz spezifische Schöpfung) である。」(Ibid., S. 380)「資本主義的生産は、とりわけ作業場内部での分業をもたらすのであって、これこそ、…大量生産を…いっそう発展させるのである。」(MEGA, II / 3・1, S. 289) マルクスは、工場内分業について明確に「近代的な分業 (die moderne Teilung der Arbeit)」(Kapital, I, S. 670) とか「資本主義的な意味の分業」(Mehrwert, S. 1401, 圈点—マルクス) あるいは「作業場内部での資本主義的分業<sup>7)</sup>」(MEGA, II / 3・1, S. 287) という規定を与えているが、工場内分業の特殊歴史性はそれが資本家による生産条件の排他的所有を社会的基礎にもつ事実起因する。一部の人々による社会的な生産条件の排他的所有が成り立てば、その社会的基礎のうえに必然的に分業にもとづく協業つまり工場内分業が形成される。ここに、工場内分業が資本の歴史的な所産たる根拠がある。工場内分業という一見小さな事柄のなかに敵対的生産関係が隠されているという意味では、「神は細部に宿りたまう」というライブニッツ (1646-1716) の金言がその工場内分業にはよくあてはまる。工場内分業の特殊歴史性は、同時に資本主義での生産力発展の特異性を説明する。だから、資本主義の基礎では、資本家は、商品所有者としては、個人的所有を代表する一方、分業の成り立つ工場所有者としては、資本主義的所有を代表する<sup>8)</sup>。なるほど、中世の同職組合 (ギルド) のもとでも、10人に満たない労働者による協業は成立したが、自由競争の排除こそ同職組合の最重要原則をなし、同職組合規則による一人の親方が使用できる労働者数の最大限の制限によって仕事場では分業は排除された<sup>9)</sup>。同種の同職組合では、同じ種類の完成生産物が親方のもとで働く職人や徒弟によってそれぞれつくられる反面、種類の相異なる同職組合のあいだで分業が形成されたにすぎない。「労働の分割は…同職組合そのもののなかでは個々の労働者たちのあいだで全然おこなわれていなかった。<sup>10)</sup>」(『ドイツ・イデオロギー』国民文庫, 真下信一訳, 52 [原ページ]) だから、中世から近代にかけては、工場内分業が発生して同職組合間

での分業と交替したことになる。「ギルドの親方は、工業的中産階級によっておしのけられ、異なる組合間の分業は姿を消して、個々の仕事場自身のなかの分業があらわれた。」(『共産党宣言』岩波文庫、大内・向坂共訳、40ページ)いうまでもなく、分業は、資本主義以前でも、例えば歴史上ピラミッドのような巨大建造物の工事にさいして人身的な支配隷属関係にもとづき散在的・偶然的には存在したが、恒常的な生産活動の基本形態として実現されることはなかった。「分業は封建制の最盛期にはわずかしかおこなわれなかった。」(『ドイツ・イデオロギー』、25 [原] ページ)「工場内の分業についてはどうかといえば、それは、これらの(族長制度やカースト制度・同職組合制度などの一頭川)社会形態のすべてにおいてほんのわずかしか発達していなかった。」(『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、183ページ)そもそも、資本主義以前にあっては、生活空間としての住居とは分離した独立の生産空間としての作業場=工場は、実は存在しなかったのである。「マニユファクチュア以前には、まだ自宅とは別個の存在としての仕事場がもたれることはなかった。」(MEGA, II / 3・1, S. 269)つまり、封建社会までは、生産活動は職住一致を原則として成り立ち家内工業的に営まれた半面、資本主義になって初めて、資本家による生産条件の排他的所有に立脚する大規模生産に規定されて職住分離が成り立ち、生産空間としての工場という独自の社会制度が形成されるにいたったのである。その意味で、工場内分業は、恒常的な生産活動の基本形態としては、資本主義に特有な生産様式である<sup>11)</sup>。ここには、資本主義以前に属するカテゴリーでさえ、資本主義の基礎上で「独自に違う歴史的な性格 (ein spezifisch verschiedener, historischer Charakter)」(『直接的生産過程の諸結果』、442 [原] ページ)を受けとる典型例の一つがある。例えば、商品それ自体は、いろいろな前ブルジョア的な社会形態に属するが、資本主義の基礎上では、資本の必然的な所産として生産物の一般的な形態になる。これと同じように、工場内分業は近代以前の社会形態にも散在したが、資本主義になって初めて資本の特有な産物として生産活動の一般的な形態になる。商品も工場内分業も、資本主義の基礎上で資本の独自の産物として形成されるがゆえに、それ以前に対比して「独自な異なる性格—歴史的な性格—」(MEGA, II / 3・1, S. 287)を受けとる

とマルクスは強調するのである<sup>12)</sup>。工場内分業は歴史上さまざまな生産形態に部分的にはみられた<sup>13)</sup>が、それは、工場内分業が資本の特有な産物たる独自の歴史的な性格を少しも解消しないのである。工場内分業を資本の特有な所産とみなすマルクスの発見には、闇夜をきりさく稲妻のような衝撃がある。マルクスにとって発見とは万人に周知の事実から誰も考えなかった因果を引きだすことである。工場内分業に超歴史的な普遍性を見るのは、棒をのみこんだような硬直的な発想といって過言でない。第12章第5節の表題「マニファクチュアの資本主義的性格」からすれば、あたかも第4節までは超歴史的な普遍性をもつ工場内分業が取り扱われるかのような取り違えが生まれがちである。しかし、第5節の分析対象は、資本主義的所有にもとづく工場内分業が労働者に与えるマイナスの影響にほかならない。マニファクチュアそのものが資本に特有な定在をなし、第5節では資本に特有な工場内分業が価値増殖のための生産的消費によって労働者にもたらすゆがみが考察される<sup>14)</sup>。

ひるがえって、資本主義社会での社会的分業と工場内分業の関係についていえば、前者は後者の論理的な前提をなし、前者が存在して初めてその基礎の上に後者が成り立つという先後関係に立つ。「工場のなかでの分業は社会のなかでの職業の分割に基づいている。」(Mehrwert, S. 1401)「工場のなかでの分業にとっては社会のなかでの分業のある程度の発展が前提である。」(Ibid.)なぜならば、社会的労働の諸生産部面への配分の結果としてのみ、各生産部面での特殊労働はそれぞれの共同生産物に結果する部分労働へと分化しうるからである<sup>15)</sup>。社会的分業と工場内分業の関係は、商品流通と剰余価値生産という資本主義の二つの構成要素のもつ立体的な関連と同一である<sup>16)</sup>。剰余価値を生む価値という資本の最も簡単な定義がしめすとおり、その産物として剰余価値を生む資本は商品や貨幣に内在する価値から成り立つため、価値の姿態変換する商品流通こそ剰余価値生産の論理的な前提である。「資本形成は、発展した商品流通を前提するから、それは発展した分業を前提するのである。」(MEGA, II / 3・1, S. 48)

以上、本節で、工場内分業は、それが資本家による生産条件の排他的所有を裏づけにもつて資本主義的所有の表現である事実を分析して、個人的所有を

あらかず社会的分業と対比した。マルクスのいう社会的分業と工場内分業の「概念的な区別 (der begriffliche Unterschied)」（*Ibid.*, S.242）とは、個人的所有と資本主義的所有の表現という両者の相違をさす。単一の太陽光線がプリズムをとおして屈折率の相異なる7色のスペクトルに分解される現象に類似して、資本家は、市場と生産という同じ資本主義の二つの局面に応じて、相異なる私有の契機をあらわす。資本は、生産条件の排他的所有という一つの関係のうちその基底的一面によって剰余労働を創造する一方、その追加的一面によって特有な生産様式をみずから創出して生産力を増進するから、それ自身のうちに生産力発展の独自の要因を含有しているのである。歴史上異数の発展をとげる資本主義社会における生産力増進は資本関係そのものに内在する。

- 1) 社会的分業も職業の専門化によって、工場内分業と同様に生産力の増進に貢献する。「生産力の発展の究極の原因となるものは、つねに、動かされる労働の社会的性格であり、社会のなかでの分業であり、精神的労働ことに自然科学の発達である。ここで資本家が利用するのは、社会的分業の全体制の利益である。」（*Kapital*, III, S. 92）第I巻第4篇で、生産力増進の要因として社会的分業は捨象され工場内分業が問題になるのは、それが資本主義に対応した生産力発展の特殊歴史的な要素だからである。
- 2) 「資本主義的生産の基礎の上ではじめて、商品であることが生産物の一般的な形態になる。」（『直接的生産過程の諸結果』, 444 [原] ページ）・「商品が生産物の一般的な必然的な形態であるということは資本主義的生産様式の独自の特性である。」（同上, 443 [原] ページ, 圏点—マルクス）「商品生産の絶対的形態である資本主義的生産」（*Kapital*, III, S. 650）。
- 3) 「商品が生産物の支配的な形態として現われ、…諸個人が商品を生産しなければならないところでは、彼ら相互の関係は、商品所有者の関係である。」（*MEGA*, II / 3 · 1, S. 288, 圏点—マルクス）「社会的資本の、それぞれの特殊な生産部門に定着している部分は、多数の資本家のあいだに配分されていて、彼らは互いに独立して競争する商品所有者として相対している。」（*Kapital*, I, S. 654）「資本家的生産者たちは互いにただ商品所有者として相対するだけである。」（*Ibid.*, III, S. 887）
- 4) 「相対的にわずかの人々の手中への生産手段の集積は、そもそも資本主義的生産の条件および前提である。」（*MEGA*, II / 3 · 1, S. 327, 圏点—マルクス）
- 5) 「独自の資本主義的生産様式…つまり大規模生産様式」（*MEGA*, II / 4 · 1, S. 213）・「協業や分業や機械などの充用、要するに大規模生産」（*Mehrwert*, S. 1143）・

- 「資本主義的生産は大規模に生産する。」(MEGA, II / 3・5, S. 1571) 「資本主義的生産は、労働過程の諸条件を、対象的なそれをも主体的なそれをも、はじめて大規模に発展させる。」(『直接的生産過程の諸結果』, 490 [原] ページ) 「商品生産という地盤は、大規模な生産を、ただ資本主義的形態においてのみになることができる。」(Kapital, I, S. 652)
- 6) 資本家は、社会的な生産手段と生活手段の排他的所有者であるから、ここで生産手段とあるのは、生活手段を含む生産条件全体をさすものと理解されるべきである。マルクスには、「生産手段—それは生活手段をも含む—」(MEGA, II / 3・6, S. 2238) とか「生産手段—労働手段および生活手段—」(Kapital, III, S. 266) とかいう規定がある。広義の生産手段が生活手段を含むのは、生産活動がイコール労働力の実現をなし、労働力の実現条件には狭義の生産手段と生活手段がともにはいるからである。「労働力の実現のための諸条件—生活手段と生産手段—」(Kapital, II, S. 37) ・「生産の客体的諸条件—生活手段, 原料, 用具—」(Grundrisse, MEGA, II / 1・2, S. 411, 圏点—マルクス) というのは、すべて生産=労働力の実現という含意をしめす。
- 7) 「資本主義的分業 (die kapitalistische Theilung der Arbeit)」(MEGA, II / 3・1, S. 243, 圏点・強調—マルクス) ・「資本主義的生産に特徴的な分業」(Ibid., S. 246) ・「特殊資本主義的な生産様式としての分業つまり作業場内部の分業」(Ibid., S. 286) ・「工場のなかでの資本主義的分業」(『直接的生産過程の諸結果』, 442 [原] ページ, 圏点—マルクス)。
- 8) 資本家が同時に二つの相異なる私的所有を代表する関係は、資本主義的生産が単純流通と剰余価値生産との重層的な統一から成り立つ関係と同じである。資本家は、流通部面で個人的所有を代表して商品所有者としてふるまう一方、生産部面では資本主義的所有をバックにして労働者に剰余労働支出を強制する。個人的所有と単純流通とが対応する一方、資本主義的所有と剰余価値生産とがベアをなす。
- 9) MEGA, II / 3・1, S. 290, Kapital, I, S. 326 f., S. 380
- 10) 「手工業、すなわち数人の職人と徒弟を使う小手工業親方。ここではどの労働者もみな完成品を生産する。」(『空想から科学へ』国民文庫, 寺沢恒信訳, 21ページ)
- 11) 『哲学の貧困』執筆時点(1847年)ですでに、工場内分業は資本に規定された労働過程の特殊歴史的な形態だという認識が確立していた事実が『資本論』第I巻第12章に明記されている。「そこ(『哲学の貧困』—頭川)では、はじめてマニユファクチュア的分業を資本主義的生産様式の独自の形態 (spezifische Form der kapitalistischen Produktionsweise) として説明した。」(Kapital, I, S. 384) マルクスの積極説の背後には、分業を「永久的な一法則」(『哲学の貧困』173ページ) ・「単純で抽象的な一範疇」(同ページ) に逆転させるブルードンに対する批判がある。つぎの主張も、趣旨は同じである。「ここで問題とされている分業は、けっして、大多数の、またきわめて多種多様な社会状態に共通する一般のカテゴリーで

- はなく、まったく規定された歴史的な・資本の一定の歴史的発展段階に対応する・生産様式なのである。」(MEGA, II/3・1, S. 273f.)
- 12) 「商品を生産するという事は、この生産様式を他の生産様式から区別するものではない。しかし、商品であることがその生産物の支配的で規定的な性格であるということは、たしかにこの生産様式を他の生産様式から区別する。」(Kapital, III, S. 886)
- 13) 「それ(資本主義—頭川)以前の諸社会形態…は、…作業場のなかでの分業をまったく排除するか、またはそれをただ矮小な規模でしか発展させないか、または散的偶然的にしか発展させないのである。」(Ibid., I, S. 377f.)
- 14) マルクスは、14世紀後半に発生した社会的にわずかな15世紀までの賃労働者について、つぎのようにいう。「都市でも農村でも、雇い主と労働者とは社会的に接近した地位にあった。資本への労働の従属は、ただ形式的でしかなかった。すなわち、生産様式そのものは、まだ独自の資本主義的性格はもっていなかった。」(Ibid., S. 766) ここで、生産様式のもつ資本主義的性格とは協業や分業という要素をさすと思われるが、ここからもわかるように、マニュファクチュアそのものが資本の特有な創造物をなす点で資本主義的性格をもつ。工場内分業にもとづく労働者のゆがみの深化というマイナスの効果だけがその資本主義的性格ではないことに注意を要する。
- 15) MEGA, II/3・1, S. 244. 逆に、工場内分業は反作用して社会的分業を發展させる (Ibid., S.287, Mehrwert, S. 1402, Kapital, I, S. 374)。機械経営はマニュファクチュアにくらべ一段と社会的分業を推進し、資本蓄積は生産部門の多様性を増大する (Ibid., I, S. 468, MEGA, II/3・6, S. 2253)。従って、工場内分業からの反作用的な社会的分業の發展によって、工場内分業による生産力増進に対応した商品販売のための市場は拡大することになる。
- 16) Ibid., II/3・1, S. 244

## 2 スミスによる二つの私有の混同

前節で、資本主義を前提すれば、社会的分業と工場内分業の社会的基礎にはそれぞれ個人的所有と資本主義的所有という相異なる二つの私有がひそむ秘密を解析した。ところが、リカードとならぶ古典派経済学の代表者のスミスでさえ、社会的分業と工場内分業の生産力發展にはたす決定的な役割を強調しながら、両者のあいだに横たわる本質的区別については皆目認識が存在しないのである。スミスによる二つの分業の混同は、個人的所有と資本主義的所有という

二つの私有の混同に還元される。そこで、本節では、二つの分業にかんするスミスの混同が二つの私有の無区別に帰着する根拠を提示して、第12章第4節でのマルクスによる二つの分業の混同批判は、第25章冒頭での古典派による二つの私有の混同命題につらなることをとく。

『諸国民の富』の中心テーマは、労働者の物質的狀態を改善する社会的富の増大が、一方で労働生産力の高さにより、他方では生産的労働者と不生産的労働者の割合つまり資本蓄積によって左右される<sup>1)</sup>ことの主張にある。両者はそれぞれ第1篇と第2篇で考察される。そこで、まずもって、スミスは、「労働の生産諸力における最大の改善と、またそれをあらゆる方面にふりむけたり、充用したりするばあいの熟練、技巧および判断の大部分とは分業 (the division of labour) の結果であったように思われる<sup>2)</sup>」(『諸国民の富』I, 大内・松川共訳, 岩波書店, 5 [原] ページ) として、社会的富の大きさを規定する生産力増進の最大の要因を分業の発展に求め、二つの分業にかんしてつぎのようという。

「社会全般の仕事におよぼす分業の効果は、いくつかの特定の製造業でそれがどのようにおこなわれているかを考察すれば、よりたやすく理解されるであろう。分業がいくつかのきわめて零細な製造業 (trifling manufactures) でもっともよく進歩している、とふつう考えられているのは、おそらくそこでの分業が他のもっと重要な製造業のそれよりも実際に進歩しているからではなくて、少数の人々のわずかの欲望を充足すべき零細な製造業では、職人の数も必然に少数にちがいないし、また仕事のさまざまの部門のおのおのに従事するのは、同じ仕事場に集められ、一人の観察者が同時に一目で見わたせるところにおかれているからであろう。これに反し、人民大衆の多大の欲望を充足すべき大製造業 (great manufactures) では、仕事のさまざまの部門がきわめて多数の職人を雇用しているから、そのすべてを同じ仕事場に集めるのが不可能なほどである。われわれは、単一部門の従事者よりも多くのものを一時に見わたすことはめったにできない。それゆえ、たとえこのような諸製造業のほうが、もっと零細な性質のものよりも、実際には仕事はずっと多数の部分に分割されているであろうけれども、その分割は、一見して自明どころではなく、したがっ

てまた観察されることもはるかにすくなかったわけである。」(同上, 5-6 [原ページ])

ここでは、社会的分業(=「大製造業」)こそ生産力増進をもたらす分業の基本型をなし、その社会的分業の生産力増大効果を明示する目的で説明の便宜として工場内分業(=「零細な製造業」)が引き合いにだされる。社会的分業と工場内分業とは、社会全体か工場内部かの相違はあれ労働の分割そのものによって生産力を増進する同一の要因だと理解され、両者の区別は社会全体か工場内部かという労働分割の規模の大小に認められるにすぎない<sup>33</sup>。社会的労働の分割である社会的分業が一つの作業場という縮小された単位で実現されるそのミニチュアが工場内分業だと理解され、それによって後者が前者と本質的区別のない同じ分業範疇に内包される。スミスが分業の生産力に与える効果を見るさいの主要な観点は、各生産部門が商品交換によって媒介されるところの社会的分業が職業の専門化をもたらし生産力を高めるという事実にある。分業が生産力発展に及ぼす最大の根拠を労働の分割=特殊の労働の成立という面に見るならば<sup>34</sup>、工場内分業で分割される労働そのものが成り立つ特殊歴史的な前提条件が閑却される直線的な結果として、それが社会的分業に対してもつ差別性もまた度外視されてしまう。マルクスがつぎのように指摘するとおりである。「A・スミスは二つの意味の分業を区別しない。したがって彼の場合、後者の意味の分業も資本主義的生産に特有なものとしては現われない。」(MEGA, II / 3・1, S. 243, 圈点—マルクス)「A・スミスは分業を、特殊な・独自の区別がある・資本主義的生産様式に特徴的な・形態としてとらえていないのである。」(Ibid., S. 244, 圈点—マルクス)「スミスは分業を特殊資本主義的な生産様式として鮮明かつ明確に理解していない。」(Ibid., S. 273) スミスは、ひきつづいて、その生産力効果の例証として有名な工場内分業としてのピン・マニュファクチュアをあげ作業分割と生産力との正の相関を論じるのは、生産力発展に果たす二つの分業の同一性だけを眼中におき両者の本質的相違の閑却をしめす端的な証拠にはかならない。「分業は、それが導入されるかぎり、あらゆる技術における労働の生産諸力を比例的に増進させる。」(『諸国民の富』I, 7 [原] ページ) スミスによれば、分業は人間だけがもつ

交換本能の必然的な帰結にほかならない<sup>5)</sup>。というのも、例えば弓矢づくりと狩猟をそれぞれ得意にする甲と乙を仮定すれば、両者にとって各自が得意な労働に特化して生産物を交換したほうが自分の利益になることをさとるからである。つまり、各人が自分の得意とする生産物の余剰部分の交換によって利益をえる確実性が人々をして特定の特殊的労働に専門化させ、ここに分業が成り立つことになる。ところで、分業の徹底化につれて、各人は他人の生産物でその欲望の圧倒的大部分を充足することになるが、それは自分の生産物の販売によって初めて可能になる。だから、分業には自分の生産物の販売までに必要な生産財や消費財からなるストックの蓄積が先行しなければならない。「織工が自分の特殊の業務に専念できるのは、自分の織物が完成されるだけではなく、売られてしまうまでのあいだ、自分を扶養し、その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財が、自分の所有としてであれだれか他の人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられているばあいだけである。°)」（同上、258〔原〕ページ）ストックの蓄積に対応して労働の分割が進展することになる。「資財の蓄積は事物の性質上分業に先だたざるをえないから、労働もまた、先だっておこなわれる資財の蓄積だけに比例してますます細分されるのである。」（同上、259〔原〕ページ）従って、スミスにあっては、生産力増進の最大の要因である分業は、商品交換によって規定される一方、ストックの蓄積が先行して初めて成り立つ因果関係にあるものと理解される。

こうして、スミスのいう分業は、ストックの蓄積を物質的基礎にしつつ交換本能に媒介されて成立するが、マルクスとの対比におけるスミスの分業論の焦点は、二つの分業の先行条件としての相異なるストックの蓄積とくに工場内分業の社会的基礎たる資本主義的所有の認識いかにある。スミスの議論には、二つの分業の本質的に違った先行条件として資本主義的所有の個人的所有に対する概念的区別が存在しない。「資財の増加は、労働の生産諸力を増進させ、より少量の労働でより多量の所産を生産させる傾向がある。多数の労働者を雇用する資財の所有者は、自分自身の利益のために、可能なかぎり最多量の所産を生産しようように、仕事を適当に分割し配分しようと必然的に努力する。…ある特定の仕事場における労働者のあいだにおこることは、同じ理由から、一

大社会における労働者のあいだにもおこる。かれらの数が多くなればなるほど、かれらはますます職業のさまざまな部門や小部門に自然に分れる。」(同上, 88 [原] ページ) 要するに、同一のストックの増加が社会的分業でも工場内分業でもその発展の原動力をなす点で両者の区別が存在しない。同一のストックの増加が二つの分業発展のアクセルとして一様に作用するのは、本源的には両者の先行条件たるストックの蓄積そのものに確たる区別がない事実に起因する。独立生産者と資本家との相違は、生産条件の個人的な私有か社会的な生産条件の排他的所有かに由来するのではなく、ストックの蓄積の量的な違いによるにすぎない。要するに、同一のストックの増加が社会的分業でも工場内分業でもその発展の原動力をなす点で区別がない。独立生産者と資本家との相違は、ストックの蓄積の量的な違いによる。「織工または靴屋のような独立の職人が、自分自身の仕事のための原料を購入したり、その所産が売りさばけるまで自分を扶養したりするのにたりるよりも多くの資財を獲得したばあいには、その仕事によって利潤をあげるために、かれはこの剰余で自然に一人またはそれ以上の日雇職人を雇用する。この剰余が増加すれば、かれは自然に自分の日雇職人の数を増加させるであろう。」(同上, 71 [原] ページ) 独立生産者と資本家のストックの蓄積にひそむ本質的な差異の閑却は、社会的分業と工場内分業の相違の看過とペアである<sup>7)</sup>。従って、これまでの展開をふまえて要約すれば、スミス分業論の吟味は二重になされる必要があることになる。まず、スミスは、工場内分業が資本主義に特有な創造物である事実を等閑に付すことで二つの分業を混同したこと<sup>8)</sup>、ついで、その二つの分業の混同はその社会的基礎をなす二つの私有の事実上の同一視に立脚することである。

『資本論』第I巻第12章にたちかえっていえば、マルクスは、その第4節「マニュファクチュアのなかでの分業と社会のなかでの分業」で事実上スミスを批判対象にすえ、二つの分業の本質的区別を確認する。マルクスは、まずもって、二つの分業は本質的に区別されると明言する。「社会のなかでの分業と一つの作業場のなかでの分業とのあいだには多くの類似や関連があるにもかかわらず、この二つのものは、ただ程度が違うだけではなく、本質的に違っている(wesentlich unterschieden sein)。<sup>9)</sup>」(*Kapital*, I, S. 375) それでは、二つの

分業の本質的な差異はどこにあるのかという説明がつぎのように展開される。「なにが飼畜業者や製革業者や製靴業者のそれぞれの独立した労働のあいだの関連をつくりだすのか？それは、彼らのそれぞれの生産物の商品としての定在である。これにたいして、マニファクチュア的分業を特徴づけるものはなにか？それは、部分労働者は商品を生産しないということである。何人もの部分労働者の共同の生産物がはじめて商品になるのである。」(Ibid., S. 375f.) ここで最初に、社会的分業では特殊的労働の生産物が商品になるのに反して、工場内分業では部分労働が共同で形成する生産物が初めて商品をつくる旨確言されるが、社会的分業で特殊的労働の生産物が商品になるという前段の主張は、生産方法のいかに関係なく市場で資本家が商品所有者としては個人的所有を代表する事実をあらわすという含意をもつ。生産物の商品としての交換は、相手方を私的所有の担い手として認めあう単純な商品所有者同士の関係を論理的前提に成り立つからである。つまり、ここで第一に、単純流通上での社会的分業は、その具体的な担い手が資本家であるにしても、個人的所有の表現だという規定が語られている。ひきつづいて、今度は、工場内分業で部分労働の共同生産物が初めて商品になるという後段の主張が掘り下げられる。「社会のなかでの分業は、いろいろな労働部門の生産物の売買によって媒介されており、マニファクチュアのなかでのいろいろな部分労働の関連は、いろいろな労働力が同じ資本家に売られて結合労働力として使用されるということによって媒介されている。」(Ibid., S. 376) ここで、工場内分業で部分労働の共同生産物が商品になる関係は、換言すれば、資本にもとづく多数の労働力の購買による媒介という事実に帰着する旨一步深められる。社会的分業は個人的所有の表現だという第一の規定に対して、ここでは、工場内分業は資本家による生産条件の排他的所有＝資本主義的所有の表現だという第二の規定がとかれるのである。そして、最後に、以上をまとめて、労働の関連が商品交換によって媒介されるか否かという二つの分業の相違は、おのおの個人的所有と資本主義的所有の違いに還元される事実がつぎのように総括される。「マニファクチュア的分業は、一人の資本家の手中での生産手段の集積を前提しており、社会的分業は、互いに独立した多数の商品生産者のあいだへの生産手段の分散を前提にしてい

る。」(Ibid., 圏点一頭川) マルクスによれば、社会的分業で特殊的労働の生産物が商品になるのは商品生産者のあいだでの生産手段の分散に立脚する一方、工場内分業で部分労働の共同生産物が商品になるのは資本家のもとでの生産手段の集積を前提する。だから、社会的分業と工場内分業のあいだには、商品生産者による個人的な所有と資本家による排他的な所有という相異なる社会的基礎がひそむというのである。要するに、マルクスにとって二つの分業を区別する商品交換による媒介の有無とは、二つの分業で労働が媒介されるさいに資本家があらわす私有の規定性の差異を意味する。それゆえ、社会的分業と工場内分業が個人的所有と資本主義的所有という相異なる私有の表現だという規定こそ、二つの分業の区別にかんするマルクスの主張の核心にほかならない。社会的分業では特殊的労働が商品をつくる反面、工場内分業では部分労働が共同で商品をつくる事実を解析して、両者のあいだに個人的所有と資本主義的所有という相異なる社会的基礎を発見した点に古典派をこえるマルクスの前人未発の独創性がある。だから、第25章冒頭の古典派による二つの私有の混同命題は、それに先行する第12章第4節での二つの分業を混同したスミス批判の観点をかえた要約である。第12章第4節でその社会的基礎に個人的所有と資本主義的所有がひそむ二つの分業の混同が批判済みであるがゆえに、マルクスは、第25章で古典派による二つの私有の混同命題を簡明に提出できたのである。

以上、本節で、スミスによる二つの分業の混同は、根本的にはその社会的基礎としての二つの私有の無区別の現われにすぎない典拠を提出して、第12章第4節でのマルクスによる二つの分業の混同批判から第25章冒頭での古典派による二つの私有の混同命題を帰結する脈絡をといた。二つの分業の二つの相異なる私有への還元によって、第12章第4節と第25章冒頭命題とのあいだに隠された回路はつながるのである。スミスにあっては、その根底にひそむ二つの私有の混同が二つの分業の混同として具体化したにすぎない。二つの分業の混同とは、その本質からすれば二つの私有の混同に等しい。

1) 「スミスは、資本の蓄積のうちに、一般的な国民的富と福祉との無条件な増大を見ている。」(Mehrwert, S. 1146)

- 2) 「一国の富裕を増進するのは分業である。」(アダム・スミス『グラスゴウ大学講義』高島・水田共訳, 日本評論社, 324ページ)「分業が富裕の直接の原因である。」(同上, 332ページ)
- 3) シスモンディ(1773—1842)にも基本的にスミスと同じ分業論が見られる。「それぞれの分業で、それぞれの労働者は、その注意を単一の物に集中することによって、彼の生産力が増大する…。それぞれの製造場の内部でも、この分業はまた繰返され、そして常に同様の結果を齎らした。」(『経済学新原理』[上], 菅間正朔訳, 日本評論社, 94ページ, 原書1819年刊)
- 4) 「生産力の基礎を、何よりも商品生産者間の分業にもとめた…。…スミスが分業の利益について語る時、かれはもっぱら労働の分割によるそれを前面におしだした。」(内田義彦『増補経済学の生誕』未来社, 231ページ, 圏点一内田氏)「スミスは、社会的生産力の直接の原因を、私的交換にもとづく分業労働に見定めた。」(和田重司『アダム・スミスの政治経済学』ミネルヴァ書房, 1978年, 88ページ)
- 5) 「私的交換が分業を前提とするというのは正しいが、分業が私的交換を前提とするというのは誤りである。」(『経済学批判』国民文庫, 杉本俊朗訳, 45 [原] ページ)「社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。」(*Kapital*, I, S. 56)「商品世界では、発展した分業が前提されている。」(『経済学批判』, 37 [原] ページ) 因みに、古代の「自然発生的なインドの共同体」(*Kapital*, III, S. 884) や「ペルー人のより人口的に発展した共同体」(*Ibid.*) に社会的分業がすでにあった事実については, *Ibid.*, I, S. 56, S. 378f., *Grundrisse*, MEGA, II / 1・1, S. 38, 『経済学批判』, 45 [原] ページを見よ。また、そこには、社会的分業はあっても、工場内分業はまだ存在していない。「共同体機構は計画的分業を示してはいるが、しかしマニュファクチュア的分業は不可能である。」(*Kapital*, I, S. 379)
- 6) 同じ主張はすでに1766年執筆と伝えられる重農学派のチュルゴ(1727—81)の著作にある。「どんな職業でも、あらかじめ労働者がいろいろの道具を持ち、自分の労働の対象である材料を十分に持つことが必要である。それに労働者はかれの製品が売られるのを待ちながら生活しなければならない。」(『富の形成と分配にかんする諸考察』『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 津田内匠訳, 所収, 94—5 ページ)
- 7) 「A.スミスは分業にかんする部分の終りのところでも、分業のもとにある労働者たちが商品所有者かつ生産者であるという前提にふたたび立ち帰っている。」(*MEGA*, II / 3・1, S. 263)
- 8) ウェークフィールド(1796—1862)は、分業の論理的前提には協業がある事実を最初に強調してスミスから分業論を一步進めた。「勤労の生産力の第一次の改善こそは、労働の分割ではなくして、労働の結合であるやうに思はれる。」(『イギリスとアメリカ』[一] 日本評論社, 中野正訳, 29ページ, 原書1833年刊)「作業の分化は労働の結合の結果である。」(同上, 32ページ) これを受けて、J・S・ミル(180

6—73)も分業に対する協業の先行性を力説する(『経済学原理』[一] 岩波文庫, 末永茂喜訳, 226ページ, 原書1848年刊)。但し, 古典派は, 工場内分業の社会的基礎には資本主義的所有があるという洞察には到達しえなかった。ここに, 古典派とマルクスのあいだに画される一線がある。

- 9)「社会的分業は, われわれがここで考察する分業とは本質的に異なっている(wesentlich verschieden sein)。(MEGA, II / 3 · 1, S. 241)「特殊資本主義的な生産様式としての分業つまり作業場内部の分業と社会全体における分業とは, 本質的に区別される。」(Ibid., S. 286)「個々の作業場内の分業とは区別される社会全体のなかのすべての分業」(Kapital, III, S. 648)。

### 3 二つの私有の混同原因

前節で, スミスによる二つの分業の混同は, 畢竟, 両者の社会的基礎としての個人的所有と資本主義的所有という二つの私有の同一視に還元される論拠を究明した。それでは, 更に一步つっこんで, スミスは, なにゆえ単純な商品生産と資本主義的商品生産とにそれぞれ対応する二つの相異なる私有を区別できなかったのであろうか。本節では, スミスがなぜ二つの私有を混同したかその封印をとく。

スミスにとって, ストックの蓄積を先行条件として成り立つ分業こそ生産力増進の最大の要因をなすものと理解される。そうだとすれば, スミスの場合, 個人的所有をあらわす独立生産者は, 特殊的労働を支出する社会的分業の担い手として剰余価値を創造することになる。なぜなら, 独立生産者の特殊的労働は, 社会的分業の一環として生産力を増進して本格的に蓄積財源をつくりだし<sup>1)</sup>, その蓄積財源が含む剰余労働は商品交換によって剰余価値に還元されるからである。スミスにあっては, 分業こそ生産力発展の牽引車であるから, 独立生産者は社会的分業をになうことによって生産力を増進せしめ, 蓄積財源の生産に寄与する。因みに, スミスによれば, 労働者は, 自給自足の条件下では蓄積財源の生産には従事しない。「分業がなく, 交換もめったにおこなわず, あらゆる人が独力であらゆるものを調達するという社会の未開状態においては, その社会の業務をおこなうために, 資財があらかじめ蓄積されたり, 貯えられ

たりする必要はまったくない。」(『諸国民の富』I, 258 [原] ページ) スミスにとっては、社会的分業が深化するにつれて蓄積財源の生産も本格的になり、社会的分業を規定する商品交換が蓄積財源に結実した剰余労働を剰余価値に還元する<sup>2)</sup>。ところが、独立生産者が剰余価値を創造するとすれば、その独立生産者の生産活動は、剰余価値生産の面では、その規定的目的が剰余価値取得にある資本家による生産活動と概念的な区別がなくなる。両者のあいだの相違は、それぞれに帰属するストックの蓄積の大きさとそれに起因する雇用労働者の有無による剰余価値の大きさにすぎない。これに反して、マルクスの場合には、独立生産者は、付加価値を形成する半面、剰余価値を創造しない<sup>3)</sup>。けだし、剰余価値は新価値のうち前貸価値をこえる超過分であるが、独立生産者は新価値形成のために価値を前貸ししないからである。別の面からいえば、そもそも、独立生産者は生産条件を所有することから、蓄積財源の生産も生産条件の所有者としてのその固有な再生産の内容をなすため、その労働支出も必要労働の一部を構成することになり、剰余労働を支出しないのである。独立生産者から転化した賃労働者には生産条件が帰属しないがゆえに、その再生産は生産条件から分離された労働力だけの再生産になり、必要労働分量は生産条件の分離に照応して圧縮される。一方、資本家は、生産条件から分離した労働力商品の購入によってその一日の使用権を手に入れ、圧縮された必要労働をこえて労働日を合法的に延長する<sup>4)</sup>。必要労働をこえる労働日の延長の帰結が剰余労働支出をなし、生産物に対象化された剰余労働が市場で剰余価値に還元される<sup>5)</sup>。従って、生産条件が帰属する独立生産者の一労働日はすべて必要労働から構成されるのに対して、生産条件を取奪された賃労働者は必要労働にくわえて剰余労働の支出を強制されることになる。だから、マルクスにあっては、個人的所有にもとづく独立生産者の生産活動と資本主義的所有に基礎をもつ資本家によるそれとは、剰余価値を生産するか否かによって原理的に区分される。換言すれば、独立生産者の生産活動と資本家によるそれとは、単なる商品生産か剰余価値生産を含むかで概念的に区分される。スミスが個人的所有と資本主義的所有という相異なる二つの私有を区別しない終極の根拠は、どちらでも剰余価値生産が原理的に成り立つとみなす考え方にある<sup>6)</sup>。スミスにとって、二つの分業が労

働生産性増大という観点からのみ観察されたのと丁度対応して、独立生産者と資本家による生産活動とは蓄積財源の創造という観点からのみ考察され、結局二つの私有の概念的区別は抹消された。独立生産者のもとでも資本家のもとでも同じく剰余価値生産が成立するとすれば、個人的所有と資本主義的所有との概念的な区別はどこにあるかが逆に問われる。個人的所有と資本主義的所有を剰余価値創造の有無で区別する正当性は、独立生産者が剰余価値生産に従事しない事実に起因する。マルクスが資本主義社会を単純流通と剰余価値生産とで重層的に構成するのは<sup>7)</sup>、単純流通それ自体には労働生産性いかに関係なく剰余価値創造が含まれない事実による。

以上、本節で、スミスが二つの相異なる私有を区別しない所以は、商品交換にもとづく分業労働が生産力増進の担い手としてすでに剰余価値を創出すると考えた点にある事実を主張した。マルクスにあっては、個人的所有と資本主義的所有との相違は剰余価値生産の有無に結果する。

- 1) 「スミス (は) 文明社会における富裕と生産力の基礎、すなわち剰余生産物成立の物的な基礎を分業労働にもとめた。」(内田義彦『増補経済学の生誕』, 222ページ) 「スミスは、分業労働こそが剰余労働を生みだす労働の様式として定立している。」(金子ハルオ『生産的労働と国民所得』日本評論社, 1966年, 49ページ)
- 2) カウツキー (1854—1938) は、独立生産者による剰余価値創造を主張する(『マルクス資本論解説』大鏡閣, 高島素之訳, 138ページ, 原書1887年刊)。
- 3) *Kapital*, I, S. 180, *MEGA*, II / 3 · 1, S. 23
- 4) 拙稿「剰余労働消滅と個人的所有の再建」『高知論叢』第48号, 1993年参照。
- 5) 独立生産者は付加価値を形成して剰余価値を創造しないという説明を支持する一方、その剰余労働支出を主張する論文に、宮川彰「マルクス剰余価値論の課題と方法」『経済と経済学』第89号, 1999年 がある。対象化された生きた労働が付加価値に還元されるのになぜ剰余労働が剰余価値に還元されないかその根拠が問われる。
- 6) 「筋の通らない帰結を引き出すということは、けっして独創的な思想家たちのすることではない」(*Kapital*, II, S. 389) とマルクスがいうが、剰余価値生産に着目して二つの私有を区別しないのは、一面でスミスの首尾一貫性である。
- 7) *Ibid.*, III, S. 886f.

#### 4 先行研究の批判的検討

前節で、スミスが二つの私有を混同した理由は、商品交換にもとづく分業労働が生産力増進の推進者として賃労働者と同じように剰余価値を創造するとみなした点にあるという見解を提出した。ところが、先行研究のサーベイによれば、二つの分業の区別が不分明な直接的帰結としてスミスが二つの私有を混同した事態とはなにかが不明な現状にある。そこで、本節では、二つの分業の区別にかんする先行研究に批判的検討をくわえ、古典派による二つの私有の混同としてマルクスの規定する事態が不明確な理由は、二つの分業の区別の生半可な理解にある事実を批判する。

スミスが二つの分業を混同した事実は経済学史上の常識に属するが、それでは、その決定的な区分とはなにかをフォローすると、支配的な見解としてつぎのような主張に例外なく出会う。「スミスは二つの分業がストックの増大とともに相関連して発展することを指摘する。スミスのみなかつたのは、その対立的な性格である。」(内田義彦『増補経済学の生誕』220ページ、圈点—内田氏)「スミスにおいては、マニファクチュア的分業における専制と強制の存在も、商品生産者のあいだの社会的分業における無政府的性格も、いわんや、その対立的な発展も、問題とされなかつた。」(同上、219ページ)つまり、一般的にいえば、社会的分業と工場内分業とのあいだには、前者の労働の分割が価値法則によってだけ規制される無政府的性格をもつのに反して、後者の労働の分割が生産者による計画的性格をもつ点で本質的な区別があるというのである。しかし、無政府性と計画性は、二つの分業のもつ特徴的な差異ではあるがそれ以上ではない。けだし、無政府性と計画性の違いは、つきつめれば、社会的分業と工場内分業とがおのおの個人的所有と資本主義的所有の表現である事実に起因するからである。二つの分業を対比するさいの根源的な問題は、労働の分割方法にあるのではなく、分割される労働が成り立つその社会的基礎いかにある。二つの分業の対比において分割される労働そのものが成り立つ社会的基礎こそ基本的な問題をなし、労働の分割方法は派生的な問題である。しかも、

無政府性と計画性という二つの分業の相違のもつ非本質的な性格は、それ自体としてはスミスの議論の根幹にふれない。スミスの基本欠陥の一つは、単純な商品交換と資本主義的なそれとのあいだの「一つの裂け目 (ein Riss)」 (*Mehrwert, MEGA, II / 3 · 2, S. 379*) を感知しながら理解しない点にあるが、無政府性と計画性という二つの分業の相違は、両者の二つの私有への還元なしには、資本主義的生産の単純な商品生産に対する差別性には触れないからである。なるほど、通例二つの分業にかんしてつぎのようにもいわれる。「マニュファクチュア内部の分業は、生産手段の個々の資本家への集中を前提にし、商品生産者のあいだの社会的分業においては、広汎な商品生産者への生産手段の分散を前提にしている。」(内田義彦『増補経済学の生誕』, 218ページ)しかし、これは、二つの分業の区別にかんする見解に反映されていない点で、それとは関連のない『資本論』第I巻第12章の単なる祖述にすぎない。生産条件の分散と集中にかんする二つの分業の社会的基礎認識は、「労働の組織としての分業は未だ生産力の範疇に属する」(同上, 228ページ)という理解と整合性を欠くからである。より積極的にいえば、二つの分業の社会的基礎が生産手段の分散と集中にあるというマルクスの叙述に本当の理解があるとすれば、二つの分業の相違は根本的には個人的所有と資本主義的所有に起因することになる最終結果として、第25章冒頭命題は、二つの分業の混同を別の観点から言い換えた規定だという結論に不可避免的に到達する。第12章でマルクスのいう二つの分業の本質的区別をもって無政府性と計画性の違いと理解するのは、『資本論』の叙述の取り違えというそしりを免れない。また、商品交換による媒介の有無そのもので二つの分業を本質的に区別する見解<sup>2)</sup>も、工場内分業のもつ特殊歴史性をドロップさせる陥穽をもつ。マルクスは、二つの分業をまず商品交換による媒介というメルクマールで仕分けしたうえで、一歩ふみこみ、工場内分業を構成する部分労働が商品を生産しないのは、その部分労働の関連が資本家による結合労働力としての消費によって媒介され、その結合労働力の消費は資本家の手中での生産手段の集積に起因するとして、結局、二つの分業のあいだの本質的区別を二つの私有の区別に帰着させているのである。マルクスにとって二つの分業を区別する商品交換による媒介の有無とは、労働の媒介にさいして資本家

がいかなる規定性をもつ私有をあらわすかをしめす。二つの分業の本質的区別として単純に商品交換による媒介の有無で満足する論法は、工場内分業の社会的分業に対する高次な歴史的差別性を抹消する表面的な主張である。二つの分業の区別は、第4篇で規定されるがゆえに労働生産性増進の仕方を問題にするそのテーマとの内面的な関連をもつという反省がそこには欠落しているのである。さらにいえば、実は工場内分業を「技術的分業」（高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店、1974年、98ページ、282ページ）と呼ぶ従来の仕方こそ、二つの分業の内奥にひそむ相異なる社会的基礎の看過を表現する<sup>3)</sup>。なぜなら、工場内分業＝「技術的分業」という見解はそれを構成する部分労働の資本による編成という一面に着目したものと推測されるが、工場内分業を「技術的分業」と規定すれば、生産条件の排他的所有という工場内分業の背後に隠されたその社会的基礎がぬけおちてしまうからである。総労働者の各部分労働への配分などの工場内分業がもつ技術的な一面は、資本家による生産条件の排他的所有というその社会的基礎のうえに成り立つにすぎない。

このように、工場内分業の社会的基礎が資本家による生産条件の排他的所有にある事実の看過によって、スミスによる二つの分業の混同命題は二つの私有の混同命題と同等だとは理解されていない現状にある。だから、第25章冒頭の古典派による二つの私有の混同命題がスミスによる二つの分業の混同批判の別の表現だという両者の関連は、現状では地下深くに埋没したままの鉅脈の状態にある。第25章冒頭命題理解の不明さは、原理的に第12章での二つの分業の本質的区分理解の不明確さに由来する。

以上、本節で、社会的分業と工場内分業の区別に関して、従来、おのおのの社会的基礎としての個人的所有と資本主義的所有の区別の看過がある必然的な帰結として、スミスによる二つの分業の混同が第25章冒頭での古典派による二つの私有の混同命題に要約される内的な関連の不明な現状を批判した。スミスといえは分業論が想起されるように、分業論はスミスのトレードマークであるが、そのスミスが混同した二つの分業の本質的区別さえ確定していないのがマルクス経済学のいつわらざる実状である。これは『資本論』研究のほうに問われるべき責任がある。『資本論』研究には、映画フィルムと映写機の関係と同

じ性格の深刻な問題が内在する<sup>4)</sup>。一周遅れのフロントランナーからの脱出が急がれる。

- 1) エンゲルスも、社会的分業＝「個別的生産」(『反デューリング論』[2] 国民文庫、村田陽一訳、470ページ、圏点—エンゲルス、以下同じ)＝「無計画的な分業」(同ページ)、工場内分業＝「社会的生産」(同ページ)＝「計画的な分業」(同ページ)をいう。二つの分業の区別を無政府性と計画性の相違にもとめるエンゲルス説は、まぎれもなくわが国先行説の源流である。
- 2) 「社会的分業と作業場内分業の根本的相違は前者が商品の交換によって媒介されるのに、後者は商品の交換によっては媒介されない、というところにある。」(岡田裕之『経済原論』[上巻] 法政大学出版局、1976年、206ページ) カール・ビュヒャー(1847—1930)もスミスによる二つの分業の混同をいましめ、労働生産物の所有者が変更されるか否かにその本質的区別を認定している(『増補改訂国民経済の成立』栗田書店、権田保之助訳、316—7ページ)。
- 3) 高島善哉氏は、「分業と協業(は)実は労働過程の問題ではなく労働関係の問題である」(『時代に挑む社会科学』、岩波書店、1986年、227—8ページ、圏点—高島氏)という問題意識から、所有関係が含まれない「労働関係」という概念を案出され、労働過程→労働関係→生産関係という上向を主張される。しかし、「労働過程の協業的形態」(*Kapital*, I, S. 790)や「労働過程の…歴史的に規定された社会的形態」(*Ibid.*, III, S. 832)という表現がしめすとおり、協業や分業は、労働過程そのものの一形態である。だから、協業や分業は、生産関係によって直接に編成替えされる労働過程の一形態としてとかれねばならない。高島氏にあって、一方で工場内分業＝「技術的分業」とされ他方で「労働関係」というタームを案出されるのは、二つの分業の本質的区別が未解決のあかしだと推量される。「技術的分業」という表現は、大河内一男『スミスとリスト』(『大河内一男著作集』第3巻、青林書院新社、1969年、124ページ)などにもひろく見られる。ローゼンベルグ『経済学史』第一巻(直井・広島共訳、白揚社、296—7ページ)には、「技術的分業」という呼称は、工場内分業という社会的範疇からその特殊性を消滅させ、二つの分業の区分を「スミスの分業論の一変種」(296ページ)たらしめるというポイントをついた指摘がある。
- 4) 「撞木と鐘と同じである。鐘はたたき方で鳴り方がちがう。」(立花隆『「知」のソフトウェア』講談社、1984年、143ページ)

## む す び

本稿で、工場内分業が資本家による生産条件の排他的所有に立脚する特殊歴史的な社会関係である事実を考察して、社会的分業と工場内分業とは、個人的所有と資本主義的所有の表現として本質的に区別される根拠をといた。まさしく、二つの分業の本質的区別をとく秘密は、工場内分業を資本主義特有な創造物と規定するマルクス独自の説明にある。工場内分業が資本主義の独特な創造物だとすれば、工場内分業の社会的分業に対する概念的な差別性は同時に解決する。その意味でいえば、これまでの『資本論』研究には、酸性雨におかされたコンクリートのようなもろさがある。マルクスは、『資本論』第I巻第4篇で、資本家による生産条件の排他的所有からなる特殊歴史的な生産関係が生産力に対してもつ特有な関係をとくことで、相対的剰余価値論にかんして古典派をこえる独創的な功績をのこす一方、古典派が等閑に付した社会的分業と工場内分業のあいだの概念的区別に明快な解決をあたえ、古典派をこえる一つの進歩を画したのである。社会科学において、マルクスは、神に指さされた人である。